

# 近世洞門僧における病との向き合い方

愛知学院大学 菅原研州

本発表では、大会のテーマ「仏教と病」に基づいて、近世の洞門僧における病との向き合い方を検討する。

日本の近世の僧侶は、江戸幕府からの統制を受ける形で、自由な活動が制限された印象を持たれた場合もあったが、実際の僧侶たちの活動を見ていくと、僧侶の本分を果たすべく、様々な努力が模索されており、その中に、人々を悩ませる諸病と向き合い、その解決に尽力する場合などが見られた。

よって、本発表では、近世洞門僧の記録の中で、僅かではあるが病に苦しむ人を「看病」した事例を紹介しつつ、それがどのような動機、或いは教義的裏付けがあったかを検討したい。特に、大乘菩薩僧としての自覚を持っている場合、当然に菩薩戒に基づいて活動したはずだが、『梵網経』の四十八軽戒には「第九不瞻病苦戒」があり、菩薩には「看病」を求めている。この一戒がどのように理解され、看病の事例との関係性を検討する。

続いて、僧侶自身が病となり、自らの死期を悟った結果、どのような行動を選択したかを紹介したい。これは、病や死をいたずらに隠すのでは無く、むしろ、縁のある人々に無常を悟らせ、道心を発させようとした事例も見られた。近年、新型コロナ禍の影響で人間関係が希薄化したためか、親族であっても、例えば入院したり、死去したりしても、知らされない場合もある。しかし、仏教では自らの病や死に向き合うことに、一定の価値を見出していたはずで、その事例を紹介することで、現状への警鐘を鳴らす機会を得たい。

更に、寺院の住職として、或いは指導者として、檀越や弟子の病に向き合い、法語などを通して助言を施した事例も紹介したい。その事例は、近現代の日本のような高度な医学が望めない状況であっても、人々の病や生死と向き合う事例として理解が可能である。概観してみると、ただ慰めるだけでなく、回復を積極的に祈る場合もあれば、無常を受け容れるように促す場合もある。ただし、禅僧は当意即妙の問答を実施している中で、病の中で苦しむ相手に、最も必要と思われる行動・言動を取った可能性があると考えている。

なお、本発表の目的だが、上記内容の検討を通して、近世洞門僧の活動や思想について、多様な理解をしたいと願っている。同時代の僧侶が、世間との関係性を保持しており、人々の苦悩に寄り添う努力をした事例を見ることで、僧侶や寺院の、社会での位置付けを探りたい。

以上の検討には、主として『曹洞宗全書』『続曹洞宗全書』（曹洞宗全書刊行会）や、『曹洞宗近世僧侶集成』（曹洞宗宗務庁）などを用い、可能な限りの事例の収集と調査を通して、本発表の目的を達成したい。

キーワード：近世仏教 曹洞宗 看病